被ばくから子ども守れ

公設国際貢献大学校（新見市哲多町田淵）が、東日本大震災の被災地・福島県内で、放射性物質を取り除く除染活動に取り組んでいる。岡山県民らから寄せられた防護の雨がっぱなども配布し、子どもたちを被ばくから守ろうと懸命だ。

高圧洗浄機で除染作業をする国際貢献大学校のスタッフ＝9日、福島県伊達市梁川体育館（公設国際貢献大学校提供）

国際貢献大学校 福島で除染活動本格化

マスクにゴーグル、青い除染作業着を身に着け、高圧洗浄機やデッキブラシを使い建物の壁や窓ガラスを丁寧に洗い流す。排水溝の泥も除去する。

東京電力福島第1原発事故により放出された放射性物質が残る福島県。入れ替わりで6人ほどの大学校スタッフが南相馬市などで活動中だ。7月から除染作業を行い、9月9日からは機器を使って本格的に始めた。10日までに、避難所として大学校が運営を支援していた伊達市の体育館と、南相馬市の診療所、通学路で行った。

作業に伴い、体育館の排水路では放射線量が毎時1・91マイクロシーベルトから同0・21マイクロシーベルトと大幅に下がったという。

南相馬市は8、9月を「除染強化月間」に指定。市職員だけでは公的施設の対応で精いっぱい。大学校は市からの要請で、月間中に少なくとも通学路や駐輪場など29カ所の除染を担当する。

大震災発生直後から大学校は被災者支援活動を続け、岡山県民らから募った日用品なども随時届けてきた。南相馬市教委と連携をとり、特に子どもの被ばく防止対策に力を入れている。

これまでに小中学生用に雨がっぱ約5300枚、マスク約46万枚、消毒液約500本を提供した。放射性物質を吸収するとされるヒマワリの種も子どもたちが多い施設にまいた。県内の子どもたちが「地震に負けないで」「一緒に頑張ろう」などと書いた手紙なども送り、地元と被災地をつなぐ役割も果たしている。

的野秀利理事長は「放射能汚染を含めた未曽有の複合災害で、臨機応変の対応が必要だ。作業が困難になる雪が降るまでに、できるだけ除染を進めたい」と話す。除染とともに、学校教育や仮設住宅での日常生活への支援も続ける方針だ。

（赤沢昌典）